

のびのび 田底っ子

第8号

文責：校長 益永 一幸

4年生「福祉体験」～経験して学ぶ～



22日（水）は4年生の総合的な学習の時間の福祉体験の学習がありました。「熊本市社会福祉協議会」「熊本市障がい者相談支援センターチャレンジ」の方々を講師としてお招きして多くのことを学ぶことができました。

「アイマスクをして一人で歩く、ペアで歩く体験」「車いすに乗って一人で動かす、ペアで動かす体験」をしました。子どもたちからは「こわ～い」「一人じゃ無理～」「ありがとう」などの声がたくさんありました。学習後の振り返りでは、「前が見えなかったのが一番むずかしかったけど、目が見えない方の気持ちが分かってよかったです。」（前田れなさん）のように、困っている人の気持ちが分かったようです。「車いす用のトイレに入るときも、だんさがなかったから入りやすかった。」（蒲池ひろとさん）や「多目的トイレは車いすの人のために使いやすいような高さにしてあり、すごいと思った。」（高石かりんさん）のように、身近な社会に福祉が生かされていることが分かったようです。

やはり、多少つらい経験、困った経験をしていくことで、その人たちの気持ちがわかり、新たな考えやみんなのための行動が生まれるものと気づかされました。

【参考コラム】星野富弘さんの「詩画集から」

皆様ご存じの、口に筆をくわえて多くの詩画を描かれた「星野富弘」さんの詩を紹介します。富弘さんは、昭和21年群馬県勢多郡東村生まれ。昭和45年に中学校の新任体育教師として赴任して間もなく、体操部活動の指導中に頸髄を損傷、手足の自由を失いました。その後、9年間にも及ぶ入院生活を余儀なくされますが、富弘さんは病院のベッドの上で口に筆をくわえ、創作活動に取り組み、素晴らしい作品を生み出していきました。その作品の中から、私が気に入っている詩の一つを以下に紹介します。

よろこびが集まったよりも 悲しみが集まった方が しあわせに近いような気がする
強いものが集まったよりも 弱いものが集まった方が 真実に近いような気がする
しあわせが集まったよりも ふしあわせが集まった方が 愛に近いような気がする

星野富弘さんの素晴らしい作品は、家族（お母さんや奥さん）の支えから生まれました。奥さんが富弘さんの顔を洗う時など顔を傷つけないように、奥さんが「結婚指輪はいらない」と言ったという詩も書かれています。